

## ぐんまの「魚道」を考える（9）

今回の魚道は、江戸川 - 利根大堰 - 坂東大堰 - 佐久発電所利根川横断サイフォンを通過した天然アユがたどり着く利根川の重要な魚道を紹介します。この魚道は、綾戸ダム（東京電力、群馬用水取水口）に設置されています。

この魚道を通ると、岩本の“坊主の瀬”・片品川合流点付近・鷲石橋付近と、“かつてのアユのメッカ”に到達します。この付近の利根川は、アユのためにあるような河川と言っても言い過ぎではないスケール、水質、大きな石、淵と極めて良好な生育環境を有しています。

下の写真は、綾戸ダムに設置してある魚道です。見えているのは約半分で、長すぎて下流が見えません。



綾戸ダムは、昭和の初期に築造されたので、魚道も恐らく昭和初期生まれだと思われます。石切り場から切り出された自然石を使って魚道が作られていて良い景観となっています。この魚道は、二つの面で群馬県では特殊な魚道と言えます。

第一番目は、長さが約 175m あり、群馬県で一番長い魚道だと思われます。魚道入口が下流に延びているので、河川流量が多い時には、魚道に魚が入りにくい構造と言えます。また、魚道の幅は、入口部 6.0m、中央部 4.5m、出口 3.0m と変化しているようです。

第二番目は、魚道に入る流量をゲート（起伏式）で制御していることです。私の知る限りでは、魚道流量の制御を群馬県内で行っているのは、ここだけだと思います。

魚道出口を上から見た様子



魚道ゲートを設置すると、河川流量の変動による魚道内流量を調節できるので、最適な魚道内の流況を維持することが出来るため、魚類の遡上に有効です。他の魚道にも設置できると良いのですが、設置するには条件が必要となります。この条件とは、1) 土砂が流下しないこと、2) 日常的な管理が出来ることの2点です。

私は、昭和50年代に魚道調査の目的で一度この魚道の側壁上を歩いたことがあるのですが、当時とほとんど景観が変わっていないと思われます。

ところで、綾戸ダムの直上流の右岸側には発電所の放水口があり、冷水問題が起きているようです。すなわち、利根川右岸に冷たい水が流れ、左岸側を温かい水が流れているものと想定されています。一般的に河川内における密度の異なる水の混合は非常に進行しにくいことが知られていますので、綾戸ダムの魚道に冷たい水が集中して流入している可能性があるのです。



冒頭で、かつての“アユのメッカ”と表現しましたが、現在の沼田地区の利根川は、アユにとって“棲めない川”となっているようです。アユの生息に厳しい状況が平成になってから急激に見られるようになってきました。

漁協による取り組みが望ましいのですが、近年では利根川本流へのアユの放流はあきらめたようで大変残念です。一方、友釣りの有志で結成している沼田の「遊魚むらおこしの会」による継続的な水温調査等が行われていますので、今後の活動の成果が期待されます。

平成19年の秋には、鷲石橋下流で大きなアユが釣れ、DNA鑑定した結果「海産アユ」と判定されて話題になりました。

美しい流れの利根川に、胸まで浸かるアユの釣り人で賑わう日は、一体何時になったら来るのだろうか？



(釣り人が見えない岩本付近の利根川)

(日本一のアユを取り戻す会 福田睦夫)